

〈論文〉

# 国際協力人材育成研究におけるアウトカムを 内部評価するための手法の考察

— PHD 協力の研修生をメタファシリテーション手法でインタビューした結果を基に —

坂西 卓郎

## 目次

### 第一章 研究の概略

- 1-1 研究背景と目的
- 1-2 研究手法と論文構成

### 第二章 先行研究の検討

- 2-1 インパクト評価における先行研究の論点
  - 2-1-1 Before-After 比較
  - 2-1-2 With-Without 比較
  - 2-1-3 厳格なインパクト評価手法（実験デザイン・ランダム化評価）
  - 2-1-4 先行研究のまとめ
- 2-2 先行研究から見えた NGO が評価主体という前提で考慮すべき事項
  - 2-2-1 実施上のコスト
  - 2-2-2 倫理的な問題
  - 2-2-3 ベースライン調査の有無
  - 2-2-4 先行研究から見えた研究の方向性
- 2-3 本研究で行う調査のメリット及びモデルの提示

### 第三章 JICA の研修員受け入れ事業との比較

- 3-1 JICA との比較
  - 3-1-1 JICA 研修員受け入れ事業と PHD 協会研修生招聘事業との比較
- 3-2 JICA における事後評価の検証
  - 3-2-1 水利組合強化計画（インドネシア）の事後評価検証
  - 3-2-2 市民社会の参加によるコミュニティ開発技術協力プロジェクト（インドネシア）の事後評価検証
  - 3-2-3 農業経営改善のための農業普及員訓練計画プロジェクトの事後評価検証
  - 3-2-4 JICA 本邦研修事業評価検証まとめ

### 第四章 テストランとしての調査概要及び結果

- 4-1 調査の背景としての PHD 協会の概要
- 4-2 調査の対象—帰国後の研修生を調査するにあたっての枠組み
- 4-3 2000 年度の外部者評価からの教訓
- 4-4 データ収集の方法
- 4-5 データの数及び結果

### 第五章 調査結果の分析方法とプロセス

- 5-1 コーディングを用いての分析
  - 5-1-1 ネパール事例のコーディング結果
  - 5-1-2 ミャンマー事例のコーディング結果
  - 5-1-3 インドネシア事例のコーディング結果
- 5-2 アウトカムの検証
- 5-3 分析結果
- 5-4 分析のまとめ

### 第六章 結論—国際研修事業の内部評価手法の考察

- 6-1 新しい発見—基盤的能力育成
- 6-2 本研究の限界
- 6-3 今後の課題

## 第一章 研究の概略

### 1-1 研究背景と目的

公益財団法人 PHD 協会（以下 PHD 協会）ではアジアの村落部から研修生を募り、日本で有機農業や保健衛生などの研修を約 1 年間行った後、本人が得た知識や技術を元の地域の生活向上に活かしてもらうという事業を続けている。しかし、その成果が可視化できないという課題を抱えている。成果がでているのか、でていないのか、また成果がでているのであればどのように可視化し他者に伝えることができるのか、そこを明らかにすることが本研究の目的である。

2000 年度に第三者評価者として当会の事業評価を行った雨森孝悦氏（現日本福祉大学教授）によると、PHD 協会の研修には 2 つの軸がある。1. 技術の習得、2. 意識変容である。そして雨森氏に言わせるとこれらは直接効果（中間成果）であり、「最終成果（インパクト）は研修生が研修後に村で普及活動を行うことによる村人の生活向上」（雨森 2001：8）と定義されている。しかしながら当会の研修生は生業を持つ生活者であり、時間や資金、能力に限りがある。PHD 協会が期待する内容は雨森氏が指摘するところの「村人から出発する村人中心の生活改善は（中略）高度な理念、目標である」（雨森 2001：8）となる。また「その反面で、村人、つまりふつうの生活者で

ある研修生やその周辺の人たちに、あまり無理をさせられないこともまた現実であり、大きなジレンマとなっている」(雨森 2001:8)と課題が指摘されている。確かに「大きなジレンマ」に苦しむ研修生も居るようであるが、他方で克服し活躍している研修生も居る。

国際協力として研修事業を実施している以上、NGO、GO 問わず何らかの援助を受けて事業を実施している。継続的な援助を受けるためにはフィードバックとしての客観的な成果の可視化は不可欠である。客観的な評価や可視化ができなければ継続的な事業運営はできない。しかし、民間の NGO、そして公的な資金により運営されている独立行政法人国際協力機構(以下 JICA)でも、研修事業の評価、特に帰国後の成果の部分については満足な評価は実施できていない。本研究が対象とする民間の NGO の場合、評価が実施できない背景にはこれまでの評価におけるコストの高さがあることが挙げられる。よって、本研究では客観性のある評価で継続的に自ら行うことのできる評価方法を模索したい。内部者が評価をする際の課題の一つは客観性であるが、利点としてはプロジェクトの評価主体とプロジェクト実施主体と重なっているため、評価から導き出される結論や提言も受容されやすいことが挙げられる。

## 1-2 研究手法と論文構成

研究手法としては、先行研究を検討し評価手法を整理する。実際の評価の検証により可視化すべきアウトカムを抽出し、元研修生のインタビューからそれをみる事ができるか検討する。

そのために第二章で開発協力におけるインパクト評価の先行研究の検証を行い、研修事業を行う NGO が評価主体という前提で考慮すべき事項を抽出し、本研究での方向性を提示する。第三章では国内で研修規模及び評価の知見が豊富な国際協力機構(以下、JICA)の研修員受け入れ事業の事業評価の検証し、研修事業評価におけるアウトカムについて考察を深める。第四章では先行研究で得られた知見を基に NGO が内部評価として行いうる客観性があり、持続

可能な評価手法を仮定し、テストランとして PHD 協会の元研修生へのインタビュー、及びアンケート調査の概要及び結果を記述する。第五章では調査結果をコーディング及びアウトカムの検証を通しての分析を行い、その結果得られた知見をまとめる。

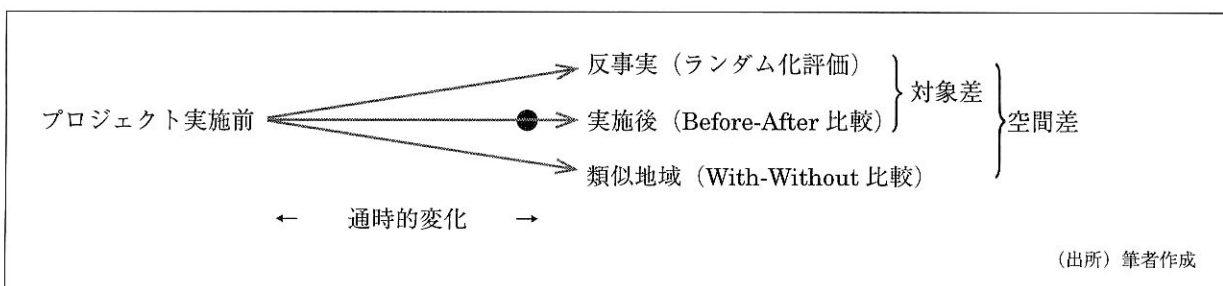
## 第二章 先行研究の検討

### 2-1 インパクト評価における先行研究の論点

論点としてはまずインパクト評価の意義について「これまでの開発援助はどのようなプロジェクトが如何程の効果を生んだかが明らかではなく、闇雲にプロジェクトを実施しており無駄が多い。ランダム化評価の実施により、成果を生むプロジェクトを特定化し、そのエビデンスに基づいて、資金も含め限られたリソースを効率的に投入することで開発効果向上が達成可能となる」(青柳 2007:89)とする認識があげられる。つまり厳格なインパクト評価を推進する立場からは、従来の評価(Before-After 比較や With-without 比較)ではプロジェクトのインパクトを正確に測定することができないとしており、「厳格なインパクト評価と呼ぶに値するものは、この問題に正面から取り組み、可能な限りバイアスの除去を試みているものと理解できる」(青柳 2008:101)とされている。

まず先行研究で論じられている従来の評価と厳格なインパクト評価について整理する。評価とは比較である。比較の対象の一方はまずプロジェクト実施後の現実である。これはどの評価方法でも同じである。そして、対象のもう一方は先行研究によると3つある。Before-After 比較による時間差、プロジェクト開始前の状況、With-without 比較による空間差、実施後と同じタイミングでの類似地域、厳格なインパクト調査による counterfactual、反事実差、同じ地域内でのプロジェクト外対象者もしくは地域となる。この各比較法とその対象との関係をまとめたものが下記になる。

では、それぞれの比較手法について先行研究により検討してみたい。



### 2-1-1 Before-After 比較

Before-After 比較は評価ではよく使われている JICA の個別プロジェクトの評価でも多く使われているとされ、その手法は「プロジェクトの受益者の Before-After の比較のみによる効果の把握である。実施前のデータは事前評価におけるベースライン調査で把握し、それに比べてどのように変化したのかを見る (JICA 企画・調整部事業評価グループ 2004 :77)」ものである。

しかし青柳 (2007) によれば「プロジェクト実施前の受益者の状態を counterfactual として用いて比較を行う。(中略) この手法によって正確なインパクトを計測することはできるのであろうか。答えはある条件を満たせば可能である。しかしながら、この条件を満たされるケースは非常に限られている。なぜなら通常、プロジェクトの行われている環境では社会的、経済的、政治的变化等が常に生じているからプロジェクトの成果指標が影響を受けることはほぼ避けられない。」(青柳 2007:95) ため、バイアスを含んだ推計値を産出してしまふからであるとする。ただし、「Before-After 比較は自身の過去の状態のみと比較するため比較グループを必要せず、簡便にインパクトを測定できる」(青柳 2007:98) ともされており、インパクト評価のために何の関係もない地域や人々を巻き込むという問題点は解決できる側面がある。

### 2-1-2 With-Without 比較

With-Without 比較は、プロジェクトに参加しなかった非受益者と受益者の成果指標の平均値の差をとることにより、プロジェクトのインパクトを推計するというものである。With-Without 比較の問題点は実際のプロジェクト参加者と非参加者の間にセレクションバイアスが存在してしまうことである。セレクションバイアスとは青柳によると「プロジェクトの対象となる受益者は、ある基準に基づいて選抜されることが多い。それは外部から観察できる指標や能力に基づいて外生的に選抜される場合もあれば、外部からは観察されない指標に応じて、潜在的受益者がプロジェクトへの参加を自ら選択する場合 (自己選抜 (self-selection)) もある」(青柳 2007:99) とされている。つまりプロジェクトの対象となる受益者は、実施対象者である NGO によって何らかの基準に基づいて選抜されることが多い。例えばマイクロファイナンス事業の場合、その受益者は元来商才に長け、見込みのあるビジネスプランを持っており、機会さえあれば実行に移したいと考えている人が利用する可能性が高い。本研究の対象である研修事業で言えば、研修生は「村の課題に取り組んでいる人」、「地域で評判の良い人」などの基準をクリアした人が選ばれており、母集団となる。そうでない母集団を

With-Without 比較の対象とするのはセレクションバイアスに直面することになり、客観的な評価とは言えない。加えて別の対象グループを巻き込まざるを得ないという点で倫理的に課題が残り、コストの問題等も発生する。

### 2-1-3 厳格なインパクト評価手法 (実験デザイン・ランダム化評価)

最も厳格なインパクト評価としては実験デザインが挙げられる。実験デザインとはランダム化評価のことを指しており、その名の通りプロジェクト実施前に受益者と非受益者をランダムに振り分ける。よって、両グループの全ての条件は均衡し、さらには通時的に生じる変化も同様に影響するためプロジェクトに参加するグループの完璧な Counterfactual のグループができる。前述したようなセレクションバイアスを回避することができるため、最も厳格なインパクト評価はランダム評価とされており gold standard と呼ばれることもある。理論的に最も厳格であり、客観性は高い。

ただし JICA が指摘するように「開発援助プロジェクトの場合、あらかじめ実施グループと比較グループを決めることはむずかしい。3~5年というプロジェクト期間において、プロジェクトから除外されるグループを同一条件下で特定することは、倫理的な意味での問題が大きいとともに、コストの問題もあるからである。」(JICA 2004:79) 研修事業を実施する NGO が評価主体と考えた場合実務的に上記の倫理的な意味とコストの問題は課題となる。実施主体の NGO の立場から考えるとプロジェクトの受益者は限られた予算や対象地域の状況などから最も効果的と考えられる選ぶ必要がある。評価の質を上げるためにその対象をランダムに選ぶことは本末転倒と言える。

### 2-1-4 先行研究のまとめ

すでに先行研究で問題とされているように時間差で比較を行う Before-After 比較によるには「プロジェクト以外の要因による変化は一切ないという前提」があり、その前提条件は成立しにくい。事後的にプロジェクトの非対象者から比較グループを作る With-Without 比較は、比較グループは「プロジェクトの対象者とは異なる母集団」にならざるをえない。一方、対象者をランダムに振り分け Counterfactual との差異を求める厳密なインパクト調査はそれらを解消できているが、先行研究でも指摘されているように同じ母集団から受益者と非受益者を分けないといけないため前述したような倫理的問題が生じる。この点は次項で論ずるが、本研究の前提である研修事業を行う NGO を実施主体として考えた場合、この

点は看過できない。よって NGO が評価主体と考えた場合にはどの手法も一長一短ということになる。

## 2-2 先行研究から見えた NGO が評価主体という前提で考慮すべき事項

今までに見てきたことを整理し、研修事業者が行う NGO のプロジェクトの内部評価として見るとインパクト評価の課題としては 1 実施上のコスト、2 倫理的な問題、3 ベースライン調査の有無が挙げられる。Before-After 比較、通時的な変化には②と③があり、With-Without 比較、空間差には②と③があり、厳格なインパクト調査には①と②の課題がある。

以下、それぞれの課題ごとに論点を整理する。

### 2-2-1 実施上のコスト

評価の実施主体を研修事業の主体である NGO として考えた時には実施上のコスト、費用と時間は切実な課題である。本研究での検討対象となる全体の 51% を占める中小規模の NGO (予算規模 2,000 万円未満、NGO データブック 2011:145) にとっては、厳格性を求め予算を度外視して精度を高めるということは現実的ではない。実際に「評価を高度な専門的レベル、多額の費用がかかる大きな規模にすると、それなりの結果は得られるかもしれないが、小規模の NGO では経済的に継続できなくなるし、逆に専門家任せになって内容や結果のシェアが疎かになったりする (アーユス 2000:3) とする指摘もある。

アーユスが 2000 年に実施した開発 NGO のプロジェクト評価の動向 (145-153) を問うアンケート調査によると、評価のデメリットとして「時間がかかりすぎて、日常業務に支障をきたした (17.1%・1 位)」、「費用がかかりすぎた (9.8%・2 位)」とありデメリットの 25% 以上を実施上のコストが占めている。また評価実施上の問題点としては「プロジェクトの成果は数値化して測ることができないものが多い 58.2%・1 位」、「スタッフの数が足りない 35.7%・2 位」、「業務が忙しくて時間がない 22.4%・3 位」、「費用がかかりすぎる 16.3%・5 位」とあり、デメリット、問題点ともに実施上のコスト負担が大きな部分を占めていることがうかがえる。

### 2-2-2 倫理的な問題

次に倫理的な問題について考えてみたい。

青柳 (2007:131) が言う様に人材育成に取り組む NGO が「プロジェクトの評価を行うという目的のためだけに、潜在的受益者をプロジェクトから排除することは正当化できない (青柳 2007:131)」のである。

With-Without 比較では、研修を行う実施グループと比較のために類似の、しかし研修を行わない比較グループとに分けて両者を比較する。したがって

With-Without 比較においては、評価のために何の関係もない人々や地域を巻き込むことになる。また実施者が NGO と想定した場合には、不要な援助への期待を抱かせるなどのリスクも生じる。さらに厳格なインパクト評価においては、プロジェクト開始時に潜在的受益者を後の評価のために排除しなくてはならないのである。

筆者としては「内部評価の場合は、正しいかどうかという議論よりも役に立つ評価を実践することが大切だ。「評価が役に立つ」とは、評価結果が組織や社会の現場で活かされるということである (アーユス 1995:8)」を軸に考え、厳格性は落ちても客観的で継続できる内部評価の確立に取り組みたい。むしろ評価をデザインする際には、プロジェクト対象地の住民や意思決定を行う人々によって評価が生かされることを念頭においておきたい。前述したように内部者が評価を行うことのメリットの一つは、評価者と実施者が同一であるためその評価が生かされやすいということである。評価を行うことによって、研修事業そのものが改善され、最終的には当該地域の生活向上というプロジェクトの上位目標に寄与する評価を本研究では考えてみたい。

### 2-2-3 ベースライン調査の有無

最後にベースライン調査の有無であるが、インパクト調査と同様 NGO が動き出す時に必ずしも厳格なベースライン調査が行われていない場合も多い。限られた人員や予算で行う場合が多く、しかし必要性に迫られてプロジェクトに入る場合も少なくない。前出のアーユスの調査によると評価を行わない理由として「プロジェクトの開始時のデータがないので比べる対象がない。14.3%・6 位」(アーユス 2003:151)とあり、ベースライン調査を行っていない団体が一定数あることがうかがえる。これは NGO としては改善していかないとはいけない状況であると思われるが、本研究では厳格なベースライン調査が必ずしも事前にできるわけではないという現実を前提にして、その場合でも有効な評価方法を考察してみたい。

### 2-2-4 先行研究から見えた研究の方向性

今まで見てきたように NGO が実施主体と考えた場合には、実施上のコスト、グループ比較における倫理的な問題、ベースライン調査が厳密ではないという課題がある。本研究ではこれらの課題を超えた評価の在り方を考察したい。

NGO は民間、もしくは公的な資金を得て活動をしている。その事業を継続していくためには評価活動を行い、資金提供者などのステイクホルダーに成果を伝えていく必要がある。またその際に主観的な評価を行っていれば、その事業が継続的な支援が得

られないだけでなく、NGO 全体が社会的に信用を得ていくことができない。結果、客観性が低い評価を続けていると NGO 活動全体にも悪影響を及ぼす。加えて主観的な評価を行った場合の問題としては、職員のモチベーションに悪影響を与えてしまうということがある。待遇が良いとは言えない職場環境で働き続けるのは一重に社会に貢献したいという思い故である。自らの貢献の結果が主観的なもので客観性が低ければ到底納得できるものではない。結果、職員のモチベーションに悪影響を与え、ひいては仕事のパフォーマンスにも影響してしまう。NGO の事務局を担う者としては職員の能力を最大限に発揮させること、NGO が社会での認知度を高めること、そして事業が継続的に運営できるための評価を模索したい。

つまり、中小規模の NGO が継続して実施できる程度の実施コストで、倫理的にも問題がないインパクト調査を研究するものである。もちろん厳格なインパクト調査は差異をはかるという点については、従来の評価と比べてより精度の高いものと考えている。しかし、NGO が主体と考えた場合、1-2-1で述べたコストという課題を克服できない。また援助主体である NGO としては1-2-2で述べたような倫理的問題を評価のために発生させるのは本末転倒だと考える。そこでより厳密なインパクト評価を志向する流れを踏まえつつも、評価のコストが現実的で持続可能性があり、かつ倫理的に問題のない評価について研究し、評価の指標を設定する。その上で2013年夏の調査を素材にテスト評価を実施して分析したい。

## 2-3 本研究で行う調査のメリット及びモデルの提示

まず前提として実施者は中小規模の NGO 自身が行う内部評価である。よって、前述の倫理的問題と実施上のコストの2点を許容可能な水準とし、その上でできるだけ客観性を担保できる評価方法を考察す

る。つまりコストが抑えられるので持続的であること、そして倫理的にも問題がないので、実務的に使いやすい評価を提案することができるはずである。重要なことはその中で援助実施者の自己満足で終わらない客観性を担保することである。

各調査方法を実施上のコストと倫理性の問題と厳格性でとらえると下図の通りである。

## 第三章 JICA の研修員受け入れ事業との比較

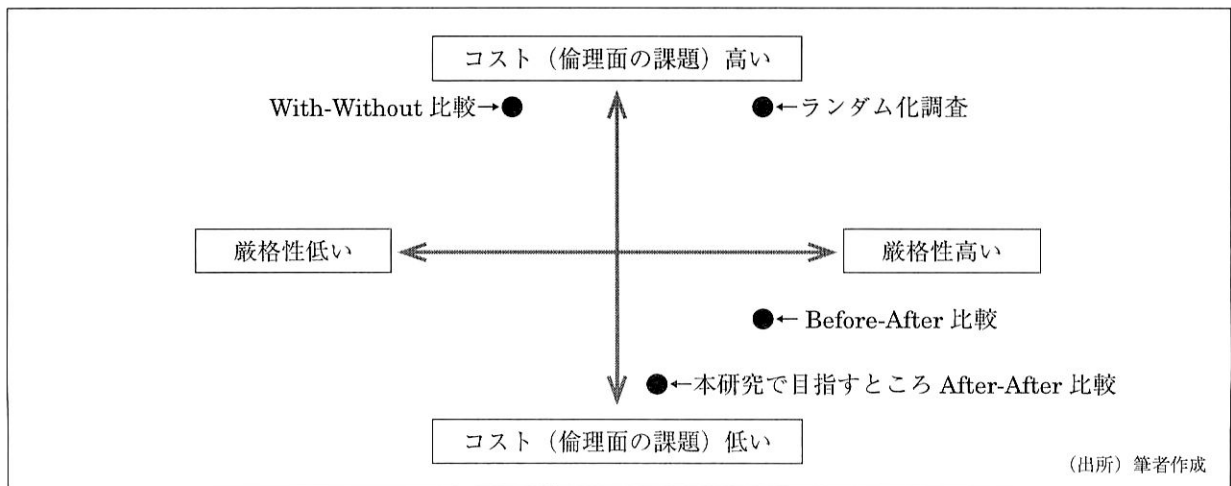
### 3-1 JICA との比較

本論では国内で最も大きな規模で研修事業を行っている JICA の研修員受け入れ事業の評価を基に検証を行う。その理由としては研修事業の経験の蓄積はもちろん、公的な資金を活用して研修事業を実施していることもあり、少なくない資金を投入して研修事業の評価を実施しているからである。

#### 3-1-1 JICA 研修員受け入れ事業と PHD 協会 研修生招聘事業との比較

JICA (2007:104) によると、研修員受け入れ事業は1954年に開始され開発途上国や地域の開発分野で中核的な立場にある行政官、技術者、研究者を対象にし、「日本の中央・地方政府、大学、民間などと連携し、それぞれの国で必要とされている知識や技術を伝えて、各国の課題の解決に役立ててもらおうというもの」と定義づけられている。また JICA (2010:145) によると JICA の本邦事業は「規模と分野の多様性の点で世界的にも類例がない」とされている。JICA (2012:123) によると「本邦研修参加者の累計は28万人を超え」となっている。

一方、筆者の属する PHD 協会は研修生受け入れ事業を1981年に開始し、研修生の累計は2013年度時点で274人なので、単純に人数の規模から見ると JICA 本邦事業の約0.1%の規模と言える。JICA 本邦研修の特徴は「規模と分野の多様性」であるが、



PHD 協会のそれは研修センターを持たない現場研修中心の研修であり、連携先として広く市民が参加している点にあると言える。

### 3-2 JICA における事後評価の検証

JICA では援助スキームにかかわらず、PDCA サイクルの各段階で評価を行っている。各段階とは事前評価、中間レビュー、終了時評価、事後評価、事後モニタリング、フィードバックと区分されており、事後評価は「事業の終了後に、有効性、インパクト、効率性、持続性等を検証。事後評価後は教訓・提言への対応等を確認」とされている。また JICA では「経済協力開発機構／開発援助委員会 (OECD - DAC) による国際的な ODA 評価の視点である「DAC 評価 5 項目」に基づく評価を採用しており、独自開発のレーティング制度を活用した統一的な評価結果の公表を行っている。

今回は公表されている JICA データベースの活用し事後評価の中から「評価が非常に高い」、かつ事業内容はできるだけ農業もしくは村落開発分野での人材育成をといった PHD 協会と関連のあるプロジェクト事後評価を中心にプロジェクトをピックアップした。

ただし JICA では「事業実施の効果を客観的な視点で検証することが求められる事後評価では案件規模に応じて外部の評価者による評価（外部評価）を取り入れている」とされており、今回ピックアップしたのも全て外部者の評価によるものである。よって本研究が対象としている内部評価とは評価実施者に違いが見られ、外部者評価の方が客観性が高いことが想定できるものの評価結果を主に検証するため評価者の差異は問題視しない。

#### 3-2-1 水利組合強化計画（インドネシア）の事後評価検証

当該評価ではプロジェクトの成果は「水利組合への指導に必要な知識・経験等習得」としている。研修事業の場合はこのように第一に研修内容の習得が成果として挙げられている。この点は他の研修の評価に見られる共通項であるが、ここで注目したいのは「間接的効果の発現状況」についても記述がある点である。上記にあるように「灌漑技術の普及によって収量が増加し、その結果、農民の農産物収入が増加し、生計の改善にも貢献したとしている」と研修内容の習得だけでなく、その延長線にある成果にも注目している。このように研修事業のアウトカムとしては研修内容の習得だけでなく、本質的な成果を評価することが重要だと思う。

一方で、成果の部分の記述については「収量が増加し」とあるものの、その具体的な増加については記述がなく不明瞭である。加えて肝心な「生計の改

善にも貢献」についても何がどのように改善されたかは明示されておらず、本評価では間接的効果の発現状況は掴めない。

#### 3-2-2 市民社会の参加によるコミュニティ開発技術協力プロジェクト（インドネシア）の事後評価検証

当該評価は「プロジェクトの成果及びプロジェクト達成度」の欄からもわかるように情報を実施主体の専門家に依っており、受益者からの情報を得ることができていない。また「人材が育成された」結果、どうなったのかが明確になっていない。本プロジェクトに記録者として専門家チームに参加していた経験から言えば、本評価は実施主体者である専門家が主眼としていた部分を成果としては把握仕切れていないように感じる。

#### 3-2-3 農業経営改善のための農業普及員訓練計画プロジェクト（インドネシア）の事後評価検証

まず「少なくとも 2 百名以上の普及員が受講、研修内容に対する高い理解を示した」と参加者数とその習得度に言及している。しかしながら、受益者である農家の変化については「目標値が設定されていない」、「必要な農家調査が行われているか不明」として「達成度の判断ができなかった」としている。そして「アウトプットは概ね達成されたが、プロジェクト目標の達成は中程度と推測される」と結論づけられている。これはプロジェクト目標の達成には、アウトプットだけでは不十分で、その後の実践及び普及が重要という理解に基づいた結論だと思われる。さらに「農家レベルでの優良事例の導入には時間を要す」とされており、最終的な成果については発現効果が表れるためには時間が必要との見解をしめしている。しかしながら、その時期がいつになるかということについては言及がない。

#### 3-2-4 JICA 本邦研修事業評価検証まとめ

本論で見てきたように研修事業はその後の効果について調査をする重要性を多くの評価で言及している。しかしながら、それらは「さらなる時間が必要」、「農家調査の必要性」とされているに留まっており、評価報告書の中で表現されていないようである。

また内部者評価のコスト面以外のメリットを発見できたことも大きかった。なぜなら今回ピックアップした調査はすべて外部者評価であり、いわゆるコンサルタント会社が実施したものである。だが評価そのものをみたとき、外部者ゆえの誤解もあり、また見込みによる記述や検証の手掛かりのない成果にたいする言及も少なくない。内部評価として受益者

自身から丁寧なヒアリングによる質的評価はこうした外部者評価に劣らない評価とすることもできると考えられる。

次章以降ではその部分について論じていきたい。

#### 第四章 テストランとしての調査概要及び結果

##### 4-1 調査の背景として PHD 協会活動の概要

JICA では評価の際に「ロジカル・フレームワーク」を用いている。通称ログフレームと呼ばれ、プロジェクトの要約表として JICA のプロジェクト・レベルの評価で広く用いられているツールの一つである。ログフレームには「ロジックモデル」の理論が内包されており、4つのレベル（上位目標、プロジェクト目標、アウトプット、活動）を因果関係で整理したものであり、「縦の理論」とも呼ばれている。これらの4つのレベルと「外部条件」との組み合わせによって、「このプロジェクトは何のために実施されるのか？」と「目標の達成には何が必要なのか？」が体系的に表すことができる。

評価のための重要な軸となる「PHD 協会における研修の狙い」を詳述すると次のようになる。「資金・物質の援助ではなく、日本にアジア・南太平洋地域の草の根の人々のリーダー、もしくは将来リーダーたりうる人材を招き、1年間、日本の生活現場で農林業・漁業・保健衛生・裁縫・編物・工芸などの職業訓練を実施し、さらには日本における社会生活体験を得て、それを帰国後、村に戻って村の人々とともに生活向上に結びつけていく「人材を育てる」ため」(PHD 協会編 1986:139)とされている。また PHD 協会のパンフレットには「色々な問題に対症療法に終わらず、根本的な解決に取り組むものとして、また村人自身による意思決定、参加を大切にする支援」とも定義されている。

したがって、その評価にあたっては、研修生本人だけでなく、「村に戻って村の人とともに生活向上に結びつけ」たかということも評価の対象となる。

本論の情報を基に次章で研修事業におけるアウトプットを検証する。

##### 4-2 調査の対象—帰国後の研修生を調査するにあたっての枠組み

当会は 1981 年に設立し現在まで研修生を招聘し続けている。2012 年度終了時点で研修を受け帰国した研修生は多い順に、インドネシア 25 名、ネパール 20 名、タイ 20 名、ミャンマー 14 名、フィリピン 12 名、バブア・ニューギニア 9 名、スリランカ 5 名、カンボジア 3 名、ソロモン 1 名、韓国 1 名、計 110 名となっている。

このうち今後の研修に反映させるという意味を重

視して近年の研修生を対象と考える。現在の 3 人制になった 2002 年から 2012 年の 11 年間では、インドネシア 11 名、ミャンマー 8 名、ネパール 7 名、タイ 4 名、フィリピン 3 名、計 33 名となる。よって上位 3ヶ国の 26 名を今回の対象とし、さらに対象国の 2002 年以前の研修生 8 名（ミャンマー 5 名、インドネシア 3 名）を加えた総数 34 名を対象とする。

検証の方法としては内部者による半構造化したインタビュー (semi-structured interview) として、面接調査及びフォーカスグループディスカッション (インドネシアのみ)を行う。インタビュー及びフォーカスグループディスカッションにはメタファシリテーション手法を用いる。その理由としては事実質問という一定の方法論を用いることで、インタビューにおける属人性を下げる効果があるからである。詳しくは後述する。

調査の概要は下記の通りである

何のために・・・プロジェクトの改善及び支援者への報告

何を・・・元研修生への研修の効果、元研修生がその成果を地域の生活改善につなげたか、もしくは効果を阻害する課題

どの段階で (いつ)・・・事後

対象・・・元研修生、34 名

##### 4-3 2000 年度の外部者評価からの教訓

ここで PHD 協会の研修生のインパクト調査として 2000 年度に行われた外部者評価について触れたい。雨森孝悦 (現日本福祉大学教授) により「PHD 協会が現在、実施している事業の評価 (事業効果の推定)を行い、同協会の事業運営改善のための基本的な資料を提供する」ことを目的として評価を得た。

まとめとして次のように記述されている。「有機農業や無農薬栽培、草木染め・手織り、村人から出発する村人中心の生活改善など、PHD 協会が北タイその他で支援しようとしていることは、いずれも高度な理念、目標である。日本でも実践がなかなか難しいことであり、いわば 2 歩先を行こうとするようなものである。けれども、この視点を見失えば PHD 協会は PHD 協会でなくなる可能性がある。その反面で、村人、つまりふつうの生活者である研修生やその周辺の人達に、あまり無理はさせられないこともまた現実であり、大きなジレンマとなっている」(雨森 2000:19)

「帰国研修生の評価」について、「どういう活動をしているのか、事務局ではほとんどつかめている。しかしこれまで正式には評価を行ってきていない。成果の確認が難しく、定量化が不可能であるからだ。村へのインパクトに関する暗黙の基準として、帰国研修生による村での働きかけが研修として確認でき

ばよしとしてきた。村人がまねをした、他の村にも広がった、等。」とまとめられている。

#### 4-4 データ聴き取りの方法

本論ではデータ聴き取りの方法について論じたい。通常、この種のインタビューの内容及び質はインタビューアーの経験、能力などに左右され易い。しかし、本研究ではメタファシリテーションにおける事実質問を用いることでそのブレをできるだけ少なくできると考える。またメタファシリテーションの特徴である事実質問を用いることで、対象者の考えに左右されずに一定の質を確保することも可能である。

人間は三つの要素で現実を捉えていることが前提となる。三つの基本要素とは「感情、気持ち」「考え、観念」「事実」である。(中田 2010:33)「感情、気持ち」は動物的な要素で、「考え、観念」はいうまでもなく人間独自のもの、「事実」それらの基礎にある物理的な用件とされている。メタファシリテーションの事実質問はその名の通り、事実を基について対話を重ねていく手法である。

#### 4-5 データの数及び結果

上記の事実質問を用いて実際に元研修生に帰国後の活動についてインタビュー調査を行ってきた。その概要及び最終的なデータ数は以下の通りである。

内部者による半構造化インタビュー (semi-structured interview) 調査報告

実施日：7月25日～8月5日 ネパール

8月20日～8月28日 ミャンマー

9月7日～9月16日 インドネシア

対象：今回の調査ではインドネシア8名(ダスウィル、アルウィ、ミミ、アフリタ、マスラル、ヘルマ、エリザ、デリ)、ミャンマー6名(トゥンティン、トゥントウン、コスウェ、マウエ、ティダ、スス)、ネパール5名(ミンクマリ、ウルミラ、パッサン、ラメシュ、ランマヤ)、計19名(達成率55.8%)に上記インタビューを実施した。また質問紙によるアンケートを実施し、インドネシア14名中14名、ミャンマーは13名中8名、ネパール7名中5名、計34名中27名(回収率79.4%)を回収した。

方法：上記のように当初は半構造化したインタビュー (semi-structured interview) による二項回答形式を予定していたが、最終的には半構造化したインタビューによる自由回答式にて実施した。二項回答形式では定量化はできるものの、その背後にある深いものは読み取れないこと、研修事業の評価で

ある場合直接的な因果関係を把握するのに不向きであることなどの理由から変更した。

今回のインタビューではメタファシリテーション手法を用い、最初の質問は考えを聞く質問を行い、その後は事実質問で質問を構成していく手法を用いた。質問項目は①帰国後、何を頑張ってきたのか、②活動する上で困難だったことは？③これからしたいことは？の項目についてインタビューを行った。

### 第五章 調査結果の分析とプロセス

#### 5-1 コーディングを用いての分析

本論ではインタビュー結果についてコーディングを用いて分析を行う。「コーディングとは、データを解釈し、概念的な単語や数字に置き換えていく作業のこと」(グラシア 2011:39)とされている。本論では調査結果からコードを抽出し、ポジティブ、ネガティブに分けて傾向を把握する試みを行う。社会科学の分析では、一般的なプロセスはコーディング、ソーティング、部分的統合、包括的統合により行われるとされている。コーディングをすることで、研修事業の成果がどのように、またどの分野で発現しているか、もしくは効果発現を阻害しているのかを見ることで、研修事業の評価の指標及びあり方を考察することが狙いである。

後述するが、コードとして使用したものは下記の通りである。

コード抽出結果—————

1. 知識技術習得についての言及
2. 日本との比較
3. 協働・周囲との連携についての言及
4. 地域課題についての言及
5. 意識変容についての言及
6. 自分の生活についての言及
7. 普及啓発の取組についての言及

##### 5-1-1 ネパール事例のコーディング結果

ネパールから招聘した研修生で対象となるのは7名、うち5名(ミンクマリ、ウルミラ、パッサン、ラメシュ、ランマヤ)から聞き取りを行った。達成率は71.4%であった。

ネパールのコードをまとめると、1. 知識技術習得についての言及、ポジティブが7、ネガティブが3、2. 日本との比較についての言及、ポジティブが0、ネガティブが2、3. 協働・周囲との連携についての言及、ポジティブが0、ネガティブが1、4. 地域課題についての言及、ポジティブが2、ネガティブが4、5. 意識変容についての言及、ポジティブが2、ネガティブが0、6. 自分の生活についての言及、ポジティブが0、

ネガティブが2、7。普及啓発の取組についての言及、ポジティブが2、ネガティブが3となる。

コーディングの結果からはネパールのガハテ村という地域における取組の特徴が見えてくる。1. や5. などの研修内容の習熟度という点においては、概ねポジティブな言及が多い。実際に当該地域の研修生たちは大変優秀で、指導者の評価も高かった。一方、2. の日本との比較においては、「水や土、気候が違う」として習得した技術を十分に生かせないことに苦悩している様子が伺える。また、1. 知識・技術習得に関するネガティブな言及についても、農業面で水の不足により、日本で学んだ知識や技術が生かせないというものが多かった。

3. 協働・周囲との関係地域についての言及については1つしか言及がなく、それもネガティブであるなど、帰国後間もない研修生たちは自らの実践に取り組んでいる段階であり、周囲との関係まではまだ至っていない様子が明らかとなった。課題への言及も多く、また日本との比較で指摘する者も多い。コードから見るとネパールは帰国後の年数が短いこともあるが、苦勞している様子が明らかである。

4. 地域課題への言及については、「教育レベルが低い」、「農道に未整備による危険性」など課題を挙げる一方、「保健状況を向上させることが重要」、「換金作物の可能性」などポジティブな面を見出している言及もある。ただし、ポジティブな言及に関しては、現時点では「発見」に留まっており、成果として具現化するにはまだ数年を要すると思われる。そして特徴的な部分として6. 自分の生活の言及についてポジティブがなく、ネガティブが2となっている点である。当該地域の研修生は皆若く(来日時18～22歳)であり、生活も豊かとは言えない生活状況であった。前述したように意識や能力は高いのだが、大会のように「生活の中での生活向上」という難しいタスクを要求している場合には、帰国後も生活の不安定によりその成果が十分に発揮できない可能性があることが示唆された。

#### 5-1-2 ミャンマー事例のコーディング結果

ミャンマーから招聘した研修生で対象となるのは13名、うち6名(トゥンティン、コスウェ、タウンティンテ、マウエ、ティダ、スス)、から聞き取りを行った。達成率は46.1%であった。

ミャンマーの研修生への聞き取りから得られたコードをまとめると、1. 知識技術習得についての言及、ポジティブが6、ネガティブが1、2. 日本との比較についての言及、ポジティブ0、ネガティブ1、3. 協働・周囲との連携についての言及、ポジティブが8、ネガティブが0、4. 地域課題についての言及、ポジティブが8、ネガティブが0、5. 意識変容についての言及、

ポジティブ、ネガティブともに0、6. 自分の生活についての言及、ポジティブが1、ネガティブが3、7. 普及啓発の取組についての言及、ポジティブが0、ネガティブが4となった。

上記の結果は筆者にはやや意外なものとなった。前提としてミャンマーは長らく軍事政権下にあり、地域でのミーティングなどが制限されてきたという歴史がある。民政移管されたのは2011年3月であり、そこからようやく市民活動がある程度自由になったという背景がある。ただ今も様々な制約は残っており、完全な自由を得られた訳ではない。よって、研修生の活動もそういった状況に影響されている側面が多分にある。

ネパールと同じく1. の知識技術習得についての言及はポジティブのみ8の言及があるなど、大変高いものとなっている。しかしながら5. の意識変容については言及がなかった。これはネパールの研修生と違い、選考時の年齢や経験も比較的豊富だったことが影響していると思われる。研修内容の習熟度という点においては、概ねポジティブな言及が多い。また2. の日本との比較においては、ネパールのように自然状況ではなく、農業機械の導入についての言及だった。これはネパールと違い田畑の面積が広いこと、中国と国境を接しているために工場の隣接などが相次ぎ、小作人の不足などの問題に直面していることが背景にあるようだ。

そして特筆すべきは3. 協働・周囲との関係地域についての言及及び4. 地域課題への言及がポジティブのみで8も言及があったことである。それも「奨学金」、「研修旅行の実施」、「小学校建設」、「マイクロクレジットの開始」、「村の道路整備」、「僧院の施設整備」、「山岳少数民族の支援」、「村の電力組織の会計監査役」、「マラリア予防」、「保健衛生の指導」など、大変多岐に渡るものであった。直接的な研修内容ではない分野での成果も多いことが伺える。そして6. 自分の生活の言及についてはネガティブが多いが、これは招聘時に学生だったものは帰国後も学業に専念せざるを得なくて苦勞していることが反映されている。最後に7. 普及啓発への取組であるが、ここまでの分析では順調な結果となっていたものの、普及においてはうまくいっていない状況が示された。これは軍事政権下で自由に活動ができなかったことも反映されていると思うが、人々の生活の変化を促すことの困難さの表れであると思われる。

#### 5-1-3 インドネシア事例のコーディング結果

インドネシアにおいては初期の研修生を対象にフォーカスグループディスカッションを行った。フォーカスグループディスカッションの特徴としては、「参加者相互のディスカッションに重きをおく点

が特徴である。議論により参加者の記憶を呼び覚まし、発見を促し、発想が広がることを狙っている。討論の相互作用を通して、多くの意見や考え方、より本音に近い感じ方を得ようとすることに目的がある。また、相互の議論を通じて、次々確認や行動、原因の明確化などをすることができる」(アーユス 2003:105)とされている。今回は当該地域の成果につ

いて様々な意見や視点を確認したいということで個別ではなく、フォーカスグループディスカッションを選択した。対象者は当該地域タベ村の研修生、ダスウィル(1999年度研修生・男性)、アフダール(2000年度研修生・男性)、ミミ(2002年度研修生・女性)の3名である。

|                          | Q, 日本での研修で役立ったこと                                                                                                                                                                                                                    | コード(解釈)                                                          | キーワード                     |
|--------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------|---------------------------|
| ダスウィル<br>(99年度インドネシア研修生) | 1. 野菜の作り方。日本は広い畑でびっくりした。どうして良い野菜がたくさんできるのかと思って、質問をした。すると指導者の渋谷さんから土をよくすることを聞くことができた。今はそれを大事にしている。                                                                                                                                   | 1. 知識技術習得についての言及(+)                                              | 野菜、日本、土                   |
|                          | 2. 家畜のこと。真柴さん(佐用町)のところで勉強した。乳牛の乳搾りをした。牛糞は肥料にしていた。ほかし肥料のことも勉強した。お金がないから、帰国後牛を1頭だけ買った。日本では、餌はアメリカから買っている。薬が入っているが、村では自然の草で、切ってすぐは良くないから、乾かしてからが良いと聞いた。今は忙しい(市議会議員に立候補したため)から、牛は隣の人がお世話をしてくれている。                                       | 1. 知識技術習得についての言及(+)<br>2. 日本との比較についての言及(+)<br>6. 自分の生活についての言及(-) | 自然の草、アメリカのエサ、乾燥、ほかし肥料     |
|                          | 3. 組合の勉強。機械とか種とか、種播き。タネを組合からもらって、あとで返す。タネをもらって、野菜ができて収穫したら、どう払いますか? 毎月とか? 前に借りて、収穫後支払いができれば、インドネシアでもできるかなと思う。                                                                                                                       | 2. 日本との比較についての言及(-)<br>3. 協働・周囲との連携についての言及(-)                    | 組合、種、返済                   |
|                          | 4. 帰国後、学校で日本語の先生をした。また日本語だけでなく、村で頑張る話も子どもたちにした。                                                                                                                                                                                     | 4. 地域課題についての言及(+)<br>7. 普及啓発の取組についての言及(+)                        | 学校で                       |
|                          | 5. 「井戸の中の蛙、大海を知らず」だった。日本に行っている意味で視野が広がった。                                                                                                                                                                                           | 5. 意識変容についての言及(+)                                                | 日本                        |
| アフダール<br>(00年度インドネシア研修生) | 1. タベは貧しい。仕事は農業だけ。当時はお米も1年食べる分は足りなかった。そして子どもも学校に行かない、農業の仕事を手伝う。でも日本では、町にも村にも水がある。子どもは皆学校に行く。道はどこも綺麗。電気もある。どうやって、タベ村でも、道をつくったり、電気が使えたり、子どもの学校を作れると考えた。大学に行くと思いいかな、と思った。                                                              | 2. 日本との比較についての言及(+)<br>4. 地域課題についての言及(+)<br>6. 自分の生活についての言及(-)   | 貧しい、綺麗、道、電気、米の自給          |
|                          | 2. 私は養鶏(肉用)が好き。作りたい。あと、農業と牛。日本で良い勉強ができた。                                                                                                                                                                                            | 1. 知識技術習得についての言及(+)                                              | 養鶏、牛                      |
|                          | 3. 日本では、町の人はマンションに住むけど、村の人も大きい家に住んでいる。日本は、町も村も同じ生活、道、水道、機械。インドネシアでは、町の人と、村の人は全然生活が違う。だから、村長になって、村のことをがんばるのがいいかな? と思った。                                                                                                              | 2. 日本との比較についての言及(-)<br>5. 意識変容についての言及(+)                         | 町も村も同じ生活、村長               |
|                          | 4. 帰国した2001年に村長の選挙に出て当選した。日本に居る間に村長になろうと考えていた。村長になってから郡からお金をもらって、水道をどうやって引くか、3人で考えた。そして、プロポーザルをかけた。タベ村でミーティングをして、みんなに「タベ村に水道欲しい?」と聞くと、みんな「欲しい」といった。「ゴトンロヨン(相互扶助)できるか?」と聞くと、「できる」と言った。電気のこと、4人でミーティングをして、どうやって電気をもらうか考えた。そして、郡に話をした。 | 4. 地域課題についての言及(+)<br>5. 意識変容についての言及(+)<br>7. 普及啓発の取組についての言及(+)   | 日本に居る間に、郡からお金を、ミーティング、考えた |

|                       |                                                                                                                                                                                                                                                          |                                            |                          |
|-----------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------|--------------------------|
| ミミ<br>(02年度インドネシア研修生) | 1. 自分のインタビューの時、村には服を作る人がいなかった。女の子だし、農業よりも保健衛生と洋服だと思った。                                                                                                                                                                                                   | 4. 地域課題についての言及 (-)                         | 女性、洋服                    |
|                       | 2. 日本に行ったら、全部綺麗。ここは天国ですか? と思った。トイレも、水も。村では、田んぼがトイレだった。                                                                                                                                                                                                   | 2. 日本との比較についての言及 (-)                       | トイレ、水、きれい                |
|                       | 3. 保育園に行った。PKK (婦人会)、ボシアンドゥ (母子保健活動)、幼稚園、日本とインドネシアは違う。インドネシアでは、0-5歳までが一緒。でも、日本では、4歳だけとか、5歳だけとか。日本で幼稚園に行くと、インドネシアでも幼稚園を作りたいと思った。どうやって作るのかを、アフダール、ダスウィルに相談した。村の人ともミーティングをして、「村に幼稚園いいですか? 幼稚園できたら、来ますか?」と聞いたら、「欲しいです、行きます」と言った。幼稚園がないと、子どもたちは遊びだけ。勉強はしないです。 | 2. 日本との比較についての言及 (-)<br>4. 地域課題についての言及 (+) | 幼稚園、PKK、ボシアンドゥ、相談、ミーティング |
|                       | 4. やりたいことがあったら、いつもミーティングをしている。幼稚園、水、学校、道、全部皆で話し合いをしている。                                                                                                                                                                                                  | 4. 地域課題についての言及 (+)                         | ミーティング、幼稚園、水             |

|    | Q, 帰国後がんばったこと                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                               | 解釈 (コード)                                                                                                      | キーワード                            |
|----|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------|
| 水道 | <p>2004年から活動を始めて、2005年にできた。資金、材料は政府から、作業はゴトロンヨン (相互扶助) で村の人たちで。1986年からあるタベ村の政府の事務所で、ミーティングをした。ミーティングをするためにタベアテ、タベバワの人40人ぐらいに手紙を書いて、持っていった。ソロ郡にはパイプとかの材料をいつくれるのか、話をしに行った。プロボザルを書いて、ソロ郡庁に持って行った。あとでソロ郡庁の人が村に来て、いろいろ調べて、OKならもらえる。水は徒歩1時間ぐらいのタベ村の山の水源から引っ張っている。まずは、村の中に水道の蛇口を19個作った。最初は家の外に作って、家5件に1個ぐらい。水道ができる前は、川の水を汲みに行っていた。歩いて30分ぐらいで大変。女も男も毎日汲みに行っていた。井戸は少しだけ。洗濯も水浴びも川でしていた。</p> <p>土を掘って、パイプを設置するのに4ヶ月。工事を始めた当初は100人ぐらいが代わる代わる作業に参加していた。あとは、30-40人ぐらいが毎日参加。大体2-3回/週。女の人はお茶とかお菓子を持って行って、男の人は作業をする。作業に参加しない人はいなかった。みんな手伝った。</p> <p>水道が壊れた時に、誰からお金をもらおうかと思った (ダスウィル)。会議をして、誰が直すのか話をした。毎月少しずつ会議でお金を集めることになった。6000Rp/月/家族。山に水があることは知っていた。でも水質が心配だった。そこでジャカルタの人に頼んで、水質を調べてOKだった。</p> <p>(アフダール) 水の次は、道がしたいと思った。</p> <p>(ミミ) とても嬉しかった。それまでは、赤ちゃんを背負って洗濯物を持って川に行っていたから、大変だった。</p> | <p>3. 協働・周囲との連携についての言及 (+)</p> <p>4. 地域課題についての言及 (+)</p> <p>5. 意識変容についての言及 (+)</p> <p>6. 自分の生活についての言及 (-)</p> | 相互扶助、ミーティング、プロボザル、水道、嬉しかった       |
| 道路 | 前は、土の道だけだった。2006年に広場の前がコンクリートの道になった。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        | <p>2. 日本との比較についての言及 (+)</p> <p>3. 協働・周囲との連携についての言及 (+)</p>                                                    | 土の道、コンクリートの道                     |
| 電気 | 1999年にはあったが、タベバワだけで、少なかった。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  | 4. 地域課題についての言及 (+)                                                                                            | 電気                               |
| 教育 | <p>教育 昔は、貧しいから小学校中退が多かった。父母が貧しいと、子どもは親の手伝いをする。親が学校に行かなかったら、子どもがたくさん生まれる、仕事がない、お金がない、これから何をするのか分からない。ご飯は1日1回だけの家族もあった。お腹がすいたら、果物、サトウキビをかじっていた。</p> <p>ダスウィルさんは高校2年 (ソロ) までで終了。父母が貧しかったから。あとで、高校卒業の試験だけ受けた。</p> <p>アフダールさんは中学校まで。お金がなかったから。あとからソロ郡から先生がMIS (イスラム系小学校) に来て、ただで勉強ができた。ミミさんもお金がなかったから中学校までで終了。その後、学校では勉強をしなかったが、試験だけを受けてパスした (500,000Rp)。今後、村づくりをするには学校の試験にパスする必要があると考えたので。アラハンバンジャンの大学で2日/週勉強した。3,000,000Rp/年×4年。</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                           | <p>3. 協働・周囲との連携についての言及 (+)</p> <p>4. 地域課題についての言及 (-)</p> <p>5. 意識変容についての言及 (+)</p> <p>6. 自分の生活についての言及 (-)</p> | 貧しい、小学校中退、食事は一日一回、仕事がない、子どもがたくさん |

インドネシアのコードをまとめると、1. 知識技術習得についての言及、ポジティブが3、ネガティブが0、2. 日本との比較についての言及、ポジティブが3、ネガティブが4、3. 協働・周囲との連携についての言及、ポジティブが3、ネガティブが1、4. 地域課題についての言及、ポジティブが7、ネガティブが2、5. 意識変容についての言及、ポジティブが5、ネガティブが0、6. 自分の生活についての言及、ポジティブが0、ネガティブが4、7. 普及啓発の取組についての言及、ポジティブが2、ネガティブが0となる。

上記の結果からは「PHD 協会活動の成功地域」と呼ばれるインドネシアの成果が見えてくる。フォーカスグループディスカッションで成果について中心に議論したこともあり、3. 及び4. についての言及が多かった。また具体的なアクションを中心に聞いたためか、7. については言及が少なかった。そして6. の自分の生活についての言及はポジティブが0、ネガティブが4と多い。これは他地域に比べて自分の生活が豊かななどのアドバンテージがあったということではなく、ネガティブな要素があったもののそれを乗り越えたという証左となる。つまりネパールの研修生のような生活が困難な状況であったものの、それを様々な努力で乗り越えたと言える。その要因としてはミミが言及している「やりたいことがあったら、いつもミーティングをしている。幼稚園、水、学校、道、全部皆で話し合いをしている。」ということだろう。一人では難しいことも、日本で同じく研修を受けた仲間と相談し、話し合うことで、地域のリソースを再発見し、課題に取り組み解決していった。つまり研修間のチームワークと協同が成果を出すためのポイントの一つということになる。そしてもう一つのポイントは、最初に取り組んだ水道事業により成果を上げたことで、村人たちの信頼を得たことにあると言えるだろう。村人に働きかけ、相互扶助での協力を得て、資金は政府から得た。そして「水道ができる前は、川の水を汲みに行っていた。歩いて30分ぐらいで大変。女も男も毎日汲みに行ってい

た。井戸は少しだけ。洗濯も水浴びも川でしていた」という状況を一変させ、村人から感謝をされた。最初に成果を上げたことが、その後の活動をし易くし好循環を生んだと言えるだろう。

## 5-2 アウトカムの検証

アウトカムはJICA (2005:51) によると「インターベンション（介入）のアウトプット（産出物）によって達成されると見込まれる、または達成された短期的、中期的・長期的な効果。なお、組織によっては長期的な効果については「インパクト」と読んでいるところもある」とされており、知恵蔵 2013 によると「成果という意味の英語で、研究がもたらす本質的な成果のことを指す。論文や特許の数といった外形的なものではなく、実際に社会にどんな影響を与えたかを評価すべきだ」という考えから、注目されるようになった。産業技術総合研究所や厚生労働省などが、評価のポイントをアウトカムに置く方式を2005年から始めた」とある。またJICAでは「アウトカム（アウトプットの結果として起こる、対象となる社会経済状況の変化）が、一義的に測定すべき業績評価」としている。一方アウトプットは「吸収した経験や学習をもとにしてできた、結果や実績」とされる。研修事業で言えば、アウトプットは研修を受けて本人におこる発露であり、アウトカムは実際に地域にポジティブな効果発現を起こすことと言える。

今回は国際協力における人材育成を目指す研修事業として、研修の習得度ではなく、その後のアクション及びアウトカムを抽出してみたい。今までに述べてきたように研修の目的を踏まえると、当人の成長を評価するだけでは不十分であり、その後のアクション及びアウトカムとして何らかのポジティブな変化を地域にもたらしたかどうかを評価し、可視化することが重要と言えるからである。

では、今までのインタビュー分析で浮かんできたアウトライン、アウトカムを整理してみる。

|                 | アウトプット（アクション／発露）                             | アウトカム（成果）                                                           |
|-----------------|----------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------|
| ダスウィル<br>1999 年 |                                              | 1. 道路建設（B）<br>2. 水道建設（B）                                            |
| アフダール<br>2000 年 | 1. 衛生的なトイレの必要性（B）<br>2. 農薬の害（A）<br>3. 働き方（B） | 1. トイレの整備（B）<br>2. 道の整備（B）                                          |
| アルウイ<br>2001 年  | 1. 農業グループ設立（A）<br>2. 組合員への啓発（A）              | 1. 小規模融資グループ立ち上げ（B）<br>メンバー7人から30人へ<br>2. 植林事業を設立（B）<br>村の人を雇用し苗づくり |

|                 |                                                                                                                                                                                                                                                         |   |                                                                                                                                                                                                                     |
|-----------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| ミミ<br>2002 年    | <ul style="list-style-type: none"> <li>1. 母子保健活動 (A)</li> <li>2. 家族計画活動 (A)</li> <li>3. 婦人会活動 (A)</li> </ul>                                                                                                                                            | → | <ul style="list-style-type: none"> <li>1. 母子保健活動が州で最優秀賞受賞 (A)</li> <li>2. 幼稚園の設立 (地域初) (A)</li> <li>3. 幼稚園が州から表彰される (A)</li> <li>4. 補助を受け新しい幼稚園設立 (A)</li> <li>5. 上水道の整備 (B)</li> <li>6. 自宅にトイレ設置が普及 (B)</li> </ul> |
| エルリナ<br>2003 年  | <ul style="list-style-type: none"> <li>1. 手洗いの啓発 (A)</li> <li>2. 洋裁の実践 (A)</li> <li>3. ゴミ捨ての啓発 (B)</li> <li>4. 母子保健活動 (A)</li> <li>5. 婦人会活動 (A)</li> <li>6. 栄養の啓発 (A)</li> <li>7. 自宅での実践 (A)</li> <li>8. 歯磨きの啓発 (A)</li> <li>9. 学校の制服を受注 (A)</li> </ul> | → | <ul style="list-style-type: none"> <li>1. 幼稚園の設立 (A)</li> <li>2. 安い価格での民族衣装の提供 (A)</li> </ul>                                                                                                                       |
| アフリタ<br>2004 年  | <ul style="list-style-type: none"> <li>1. 幼稚園設立活動 (A)</li> <li>2. 幼稚園でボランティア開始 (A)</li> <li>3. 元研修生と協働 (A)</li> </ul>                                                                                                                                   |   | <ul style="list-style-type: none"> <li>1. 政府の補助を得て上水道を整備 (A)</li> <li>2. 衛生的なトイレの普及 (B)</li> <li>3. トイレの普及率 100% を達成 (B)</li> </ul>                                                                                 |
| マスラル<br>2005 年  | <ul style="list-style-type: none"> <li>1. 農業協同組合設立 (A)</li> </ul>                                                                                                                                                                                       | → | <ul style="list-style-type: none"> <li>1. 農薬、化学肥料使用の減 (A)</li> <li>2. 村民と協働で道の整備 (B)</li> <li>3. 上水道の整備 (B)</li> <li>4. 道路のコンクリート化 (B)</li> <li>5. 政府の補助を受けて灌漑整備 (B)</li> <li>6. 橋の建設中 (B)</li> </ul>               |
| ブットラ<br>2006 年  | 病気のため死亡                                                                                                                                                                                                                                                 |   | 病気のため死亡                                                                                                                                                                                                             |
| ヘルマ<br>2007 年   | <ul style="list-style-type: none"> <li>1. 母子保健 (A)</li> <li>2. 小学校教員 (A)</li> <li>3. 大学での資格取得 (B)</li> </ul>                                                                                                                                            |   | なし                                                                                                                                                                                                                  |
| ベリスマン<br>2008 年 | <ul style="list-style-type: none"> <li>1. 有機農業の指導 (A)</li> <li>2. 家畜肥料の指導 (A)</li> <li>3. 村民との道路建設の相談 (B)</li> </ul>                                                                                                                                    |   | なし                                                                                                                                                                                                                  |
| ロザ<br>2009 年    | <ul style="list-style-type: none"> <li>1. 幼稚園の先生 (A)</li> <li>2. 洋裁の実践 (A)</li> <li>3. 家族計画の指導 (A)</li> <li>4. 母子保健の指導 (A)</li> <li>5. 選挙管理委員会業務 (B)</li> <li>6. 農民グループの運営 (B)</li> </ul>                                                               |   | なし                                                                                                                                                                                                                  |
| インドラ<br>2010 年  | <ul style="list-style-type: none"> <li>1. 衛生環境の啓発 (A)</li> <li>2. 農業グループ設立 (A)</li> <li>3. 有機農業の指導 (A)</li> </ul>                                                                                                                                       |   | <ul style="list-style-type: none"> <li>1. 水道整備 (B)</li> </ul>                                                                                                                                                       |
| エリザ<br>2011 年   | <ul style="list-style-type: none"> <li>1. 洋裁の実践 (A)</li> <li>2. 保健衛生の啓発 (A)</li> <li>3. 母子保健の資格取得 (A)</li> <li>4. 幼稚園での指導 (A)</li> </ul>                                                                                                                |   | なし                                                                                                                                                                                                                  |
| デリ<br>2012 年    | <ul style="list-style-type: none"> <li>1. 有機農業推進活動 (A)</li> <li>2. 学校での教育活動 (B)</li> <li>3. モスクでの教育活動 (B)</li> </ul>                                                                                                                                    |   | なし                                                                                                                                                                                                                  |

成果を上記のようにアウトプットとアウトカムに分けた。研修事業の成果としてはアウトプットが研修を受けた人材の研修成果の発露と言える。4-1で見たように PHD 協会では「村に戻って村の人とともに生活向上に結びつけ」たかということを研修事業の目的としており、それはまた多くの国際協力活動と重なる。その意味においてはアウトプットが周囲の人々や地域に与える効果や実際に地域の生活が向上したのか、というところがアウトカムということになる。

ちなみにアウトプットは 32 の言及があり、アウトカムは 24 の言及があった。直近 5 年（2008 年～2012 年）で見るとアウトプットが 13 に対し、アウトカムは 1 しかない。これは帰国後、研修成果をアウトプットとして発露することは比較的容易だが、実際にアウトカム効果が現れるには 5 年以上の年月を要することを示していると言える。インタビューからも明らかになったのは、アウトプットとアウトカムの発現は帰国後「まずは伝える⇒自分の範囲で実践⇒住民を組織する⇒活動開始⇒成果の具現化」と時間をかけて展開するということである。よって、5 年を一区切りとしてアウトプット調査からアウトカム調査へ移行することが考えられる。

また効果発現までの時間が一定ではない例ももちろん見られた。例えばミャンマーのトゥントウンである。トゥントウンは 1994 年度の研修生、帰国後は出稼ぎやホテルなどで仕事をし、地域や周囲への波及が見られずの研修目的から見ると失敗例と考えら

れていた。しかし、2009 年に NGO ヤンギンを立ち上げ、現在では HIV の予防などを政府とも協働しながら地域で展開している。NGO の立ち上げは実に帰国後 14 年後のことであり、その間に研修生と PHD 協会の連絡が途切れていたらこの成果は把握できなかった。効果発現がいつになるか傾向は読み取れるものの、最終的にはわからない。国際協力、特に人材育成において改めて長期的な視野で捉え「人を信じて待つ」という原則の重要性が浮かび上がったと言える。

次にアウトプットとアウトカムを技術研修の直接的な成果（A）と基盤能力の向上効果（B）に分けた場合、アウトプットは前者が 28、後者が 5、アウトカムは前者が 8、後者が 16 となった。直接的な成果は「幼稚園の設立」、「洋裁の実践」、「有機農業の普及」などがあった。また間接的な成果としては波及効果として基盤設備の整備が挙げられ「道路建設」、「水道建設」、「共済グループ立ち上げ」、「トイレの設置」、「灌漑整備」などであった。後者はどれも直接的に日本で技術研修をした訳ではないが、日本でそれぞれの利便性や意味を体感し、帰国後に地域社会の基盤施設整備として具現化したものと考えられる。

次にネガティブな言及として、困難だったことを取り上げ、さらにどのように乗り越えたかを下記の表にまとめた。「困難だったこと」と「どのように乗り越えたか」について因果関係がある記述については矢印でつながりを表記した。

|                 | 困難だったこと                                                 | どのように乗り越えたか                                        |
|-----------------|---------------------------------------------------------|----------------------------------------------------|
| ダスウィル<br>1999 年 | 1. 農機具の不足                                               | 2. ゴミの教育                                           |
| アフダール<br>2000 年 | 1. ゴミの教育<br>2. 貧困                                       |                                                    |
| アルウィ<br>2001 年  | 1. 有機肥料の製造<br>農機具の不足、土壌分析                               | 2. 共済－会計の問題                                        |
| ミミ<br>2002 年    | 1. ゴミの教育<br>2. 口腔衛生                                     | 1. 助産師と相談<br>2. 口腔衛生の啓発強化                          |
| エルリナ<br>2003 年  | 1. 幼稚園教員の資格取得の義務化                                       | 1. 洋裁と子育ての両立                                       |
| アフリタ<br>2004 年  | 1. 教育、就学率の低さ<br>2. 洋裁（男性用ズボン）<br>3. 口腔衛生                | 1. 幼稚園での就学前教育の強化<br>2. 元研修生から学ぶ<br>3. 幼稚園での口腔衛生の教育 |
| マスラル<br>2005 年  | 1. ゴミの教育<br>2. 口腔衛生<br>3. 有機農業による収量の低下<br>4. 有機野菜の価格の低さ | 1. ゴミ箱の設置<br>2. 口腔衛生の啓発                            |

|                 |                                                                                   |         |
|-----------------|-----------------------------------------------------------------------------------|---------|
| ブットラ<br>2006 年  | 病気のため死亡                                                                           | 病気のため死亡 |
| ヘルマ<br>2007 年   | 1. 道の未整備<br>2. 幼稚園の建物改修                                                           | なし      |
| ベリスマン<br>2008 年 | 1. 堆肥の輸送                                                                          | なし      |
| ロザ<br>2009 年    | 1. 幼稚園の先生<br>2. 洋裁の実践<br>3. 家族計画の指導<br>4. 母子保健の指導<br>5. 選挙管理委員会業務<br>6. 農民グループの運営 | なし      |
| インドラ<br>2010 年  | 1. 衛生的な生活の啓発<br>2. 堆肥の指導<br>3. 有機農業の方法<br>4. 研修成果の普及                              | なし      |
| エリザ<br>2011 年   | 1. 洋裁の材料購入<br>2. 幼稚園の質の向上                                                         | なし      |
| デリ<br>2012 年    | 1. 有機農業の促進<br>2. 教育、文化の課題<br>3. 宗教の課題                                             | なし      |

多くの研修生が口腔衛生とゴミ処理や衛生問題のことを指摘しているが、他者の行動を変えることに苦労している様子がここでも伺える。乗り越えたことについても、自分の努力での変化、「ゴミ箱の設置」や「元研修生から学ぶ」などが大半を占めている。このことから研修生の努力で改善できる点、アウトプットとしての成果を出すことは比較的容易であるが、アウトカムにつながる普及啓発においてはより困難であることがここでも確認できる。またアウトプットとアウトカムと同じく、どのように乗り越えたのか、という点についても近年の研修生は記述が少ない。前掲した「まずは伝える⇒自分の範囲で実践⇒住民を組織する⇒活動開始⇒成果の具現化」で言えば、「まずは伝える⇒自分の範囲で実践のあたりであろう。また乗り越えられた点については成果のところに記述されている場合もある。これらのことから「どのように乗り越えたのか」もしくは「困難に直面した時の対応についての言及」というのは研修成果が個人のアウトプットから地域社会のアウトカムに移行しているかどうかを示す指標及びコードの候補の一つと言える。

### 5-3 分析結果

ネパールのコーディングの結果からは、研修生の評価としては研修内容及び意識の変容に関しては十分な成果を上げていると言えるが、帰国後の厳しい状況には十分にうまく対応できているとは言えないことが見える。その理由を探ると、水や土などの条

件の悪さという前提条件だけでなく、研修生の年齢、生活状況、帰国後の期間といった条件が捉えられる。招聘時の年齢が若いと帰国後もなかなか地域で簡単には信頼が得られずに活動が展開できないこと、また自分の生活状況などが厳しい場合は、普及啓発活動の段階まで到達しにくいこと、そしてこれは他の国の例でも明らかであるが、成果を出すためには帰国後5年は準備期間や試行錯誤の期間が必要であることなどが見えてきた。よって、当該地域ではアウトカムとして表現できるものは現時点では見当たらなかった。一方では、将来に向けて、「資格の取得」、「換金作物の栽培」など取り組みを始めている研修生もあり、種まきははじめているので、5年後にはアウトカムとして芽を出していることが期待されるので、その時期のフォローアップ調査を行うことの必要性が示唆されたと言える。

一方、ミャンマーの結果を見ていくと、ネパールの研修生の帰国後と比べ、地域課題に取り組み、実際に周囲との関係を、しかも他分野で行っている様子が浮かび上がってきた。その要因としては前述したように来日時の年齢や、帰国後の生活状態が安定していたことなどが挙げられる。地域特有の課題としては軍事政権下での束縛によって自由な会合や普及啓発活動が制限されていること、中国と国境を接していることによる急速な市場化の中で、農業分野では工場労働者の増加による小作人の減少や保健衛生分野では中国からの安価なしかし質の良くない食品類の導入による健康面での懸念など、新たな課題

と直面していると言えるだろう。ただ前述したように研修生はそれぞれ自分のテーマを見つけ、普及には困難があるものの活動を展開していることも明らかとなった。現在の元研修生の取組、即ちアウトプット自体を1つの成果と捉え、さらなるアウトプットまたアウトカムにつなげるためにはどのようなサポートができるか、評価で得られた知見を基礎に現地側と議論していくことで、より目に見える成果へとつながると思われる。

#### 5-4 分析のまとめ

本章では5-1で述べたようにインタビューを素材にコーディングを行った。結果、コードとしては下記8つが抽出された。1. と5. は研修事業の習熟度を表すもので、知識技術と意識変容に別れる。帰国後の地域及び自分の生活への認識、分析が2. 4. 6. となった。そして帰国後のアクションとして成果に直結するのが、3. と7. 実践、それも個人に留まらない活動として3. 波及効果を表すものとして7. を抽出することができた。そして上記にそれぞれポジティブ+とネガティブ-を付加した。例えば「3. 協働・周囲との関係についての言及 (+)」…協働をしてみたいといった事例についての言及、「3. 協働・周囲との関係についての言及 (-)」…協働を試みた、もしくははやってみたが困難だった状況への言及。コードに加えて、ポジティブとネガティブを分けることで、傾向をはっきりと区分するためである。

指標としては、3. 7のポジティブコメントが多いほど5. 自分の生活への言及多いほど成果につながると言える。また3. 7においてはネガティブコメントも取り組んだ結果であることが多く、ポジティブ評価に変わりうる種と見ることができよう。一方、6. のネガティブコメントが多いほど、アウトカム移行に苦労しているということが明らかとなった。

コード抽出結果———

1. 知識技術習得についての言及
2. 日本との比較
3. 協働・周囲との連携についての言及
4. 地域課題についての言及
5. 意識変容についての言及
6. 自分の生活についての言及
7. 普及啓発の取組についての言及
8. 困難に直面した時の対応についての言及

分析をした結果、コーディングを行い、ポジティブとネガティブに区分することで、それぞれの地域の状況及び帰国研修生の活動などの現地点を明確にすることができた。またインタビュー手法において、メタファシリテーションを用いることで、インタビューという経験、感性という属人性の高い調査に

おいて、一定の共有形を提示することができ、その結果の幅を少なくできると考えられる。ただし、この点においては評価の実践を重ねて検証することが不可欠である。

本調査において7コードが抽出できた。上記に加えて5-3アウトカムの検証で明らかになった「困難に直面した時の対応についての言及」を加えた8項目、これらは評価、今後のインパクト調査評価指標となる。今後の調査においてはこれらのコードを活用することで調査の効率化とコストの軽減につなげることができる。

筆者は先行研究の問題点として、倫理的課題と高い実施上のコストをあげた。本研究では後者に関しては調査実施においては高いコストはかかっているが、分析段階で大量のテープ起こしなどの人的コストがかかった。この点では研究ベースではなく、実務的实践を考えた場合は大きな課題となる。しかし、今回の研究成果としてコードが抽出できたので、今後は調査段階でコードによる分析及び定量化を実施することが可能になり、コストの部分も大きく削減が可能となると考える。この点は同様の研修を行う団体に本研究の手法を一般化するには欠かせない重要な点である。例えばインタビューをしながら、0-5分にコード①が何回、コード②が何回などの分析を行うことで、インタビューをしながら傾向が把握でき、調査の質そのものを高めることも可能になる。よって、倫理的課題及びコストを克服した上で、かつ客観性の高い調査及び評価への下地作りが整ったと言える。

## 第六章 結論—国際研修事業の内部評価手法の考察

### 6-1 新しい発見—基盤的能力育成

調査から見えたことはアウトプットやアウトカムとなる効果発現が広範囲に及んでいるということだった。例えば1999年度のインドネシアからの研修生であったダスウィルは農業の研修を受けた。しかし、前述したように帰国後の活動は農業だけに留まらず、水道建設や道路の整備など、広範囲に及んでいる。同じくインドネシアからの研修生(2000年度)アフダールさんは帰国後村長になり、地域の課題解決に取り組んでいる。また2010年度のネパールからの研修生ミンクマリさんは農業研修を主に受けたが、帰国後は助産師学校に入学し、資格を取得し、現在は助産師として活躍している。

研修事業の直接的成果を専門的知識と組織運営能力と定義し、基盤的能力として日本で得た知見や資格の応用可能性と定義した場合、上記のようなケースは間接的効果が表れていると言える。例えばミン

クマリのケースでは、農業で方法論を見つけ帰国した。しかし、帰国後の現実に直面し、農業の道は一度断念した。しかし、農業分野で専門性の重要性を認識した彼女は、ただがんばるということでは現実を変えられないことを理解し、帰国後再学習をして助産師として専門性を身に着けるということをしている。それは学びとその成果の発露という基盤的能力を身に着けていると考えることができるだろう。

また次のような例もある。32期研修生（2013年度）のダリスマン（インドネシア）は次のように述べている。「私はインドネシアに居た時は人前で話すことができなかった。人前にでうるといつも震えていたし、次の日のそういう機会があると学校に行かないこともあった。しかし、日本の人は「日本語がうまい」と褒めてくれる。本当はまだまだ下手なのはわかっているが、褒めてくれる。そのことで私は自信を得ることができた」。この点も技術研修だけでは育成できない基盤的能力向上の効果と言える。

日本と研修生の地域差を考えれば、技術研修の成果をそのままに生かすことには現実的な壁がいくつもある。農業であれば、気候、雨、土、水、そして機材の存在や市場の存在など、差異は多い。その中で、学んだことを活かしていくにはこの応用可能性であり、基盤的能力の向上が欠かせない。ミンクマリのように他の分野に移行する際はなおさらである。しかしながら、これらのことは今まで強く意識はされてこなかった。意識されてこなかったということは、もちろん評価の対象にもなっていなかった。

したがって評価の対象自体を見直す必要がある。端的に言えば、今までのような技術研修の評価だけでは不十分で、基盤的能力の向上による波及効果の評価が必要ということになる。この点は従来の評価ではわからなかったことであり、新しい発見と言える。これは評価の枠組み、ひいては研修のねらいから評価という枠組みを超えて研修事業全体を見直すことに繋がることになるものである。例えばJICAでは「評価結果の活用を重視する評価」として「対象プロジェクトの改善に関する提言、実施中あるいは将来の類似プロジェクトに対する教訓のフィードバック」を行っているが、その対象として①JICA基本方針への反映、②プロジェクトへの反映、③相手国政府の政策への反映を挙げている。これにあてはめれば本研究の新しい発見は②プロジェクトへの反映を超えて、①にあたるPHD協会の基本的方針への反映に繋がるものであると言える。

実際に基盤的能力の向上を意識しているプログラムとして研修のふりかえりという時間がある。これは研修から帰ってきた後に事務所で研修担当職員と研修生で行う。主にはre-learningと研修内容を村でどのように実践するかという適応を検討する時間と

なっている。この時間は近年重要視しているが、基盤的能力向上を強く意識しての実践でもあった。また研修センターを持たずにホームステイを行い、現場での実施研修を重視し、多くの人々との交流の中で研修を行うというプログラム全体が基盤的能力の向上を意図した設計になっていると言えるだろう。このことは今までは暗黙知としてしか理解されておらず、本研究を通して形式知となったものである。また基盤的能力の強化を重要事項としてプログラムを見直せば、変更すべき点や新たに追加すべき点など改善点も多く出てくるだろう。

## 6-2 本研究の限界

本研究は第一にNGOが主体という前提で倫理的に問題なく、コスト的に持続可能なものを見出そうとした試みである。第二章の先行研究の分析で述べたように評価の客観性だけを求めるのであれば厳格なインパクト調査をはじめ、より適切な他の調査方法が存在している。よって、客観性や正確性という点では限界があるのが一点目である。

そして、4-1で述べた上位目標の評価、対象地域の有機農業の普及率や対象地域の保健衛生活動の実施率の評価を行うには当事者以外のインタビューや参与観察が必要であり、本研究で提示した枠組みではカバーできない。これが二点目の限界と言える。

本研究では「NGOが持続的に実施できる客観性を担保した評価手法」を検討してきた。その視点からコスト及び倫理的に問題のない評価手法を模索してきた。特に後者のために評価対象者を当事者限定にしているので研修を受けていないグループの比較はできない。またその波及効果、周囲の人々や客観的データから詳細に追うことはできていない。ただし、当事者のインタビューからでも水道建設による生活の質の向上や、道路建設による利便性の向上、保健衛生の指導による下痢などの防止など、地域への波及効果が感じられる報告はいくつかあった。しかし、最終的にアウトカムを評価する場合には、地域における感染症が何%低下した、というような地域全体を対象とした調査分析が必要になるだろう。

しかし、こうした限界があるとしても内部評価として援助主体が被援助者にメタファシリテーションの手法によりインタビューを行い、コーディング分析を行うことで、自らの研修成果を一定の客観性をもって評価することができ、内部評価であることがかえって事業や組織の目標にあった検証が行えることも示すことができた。

## 6-3 今後の課題

今回は1年という期間の中で評価手法を検討、質問項目を設定し、テストランを行った。本来であれ

ば本研究で明らかになったコードなどの領域を基に再調査を行い、その実効性を確かめ、質問項目を再検証し、再度分析をして検証することが求められる。持続可能な調査という実施上のコスト制約があっても、まだ質を高められるはずであるからである。特にコスト負担を減らすためにコーディングをより効率的に行う方法を構築すること、テープ起こしなどの作業がコードが抽出されたことにより、どれぐらい軽減できるかの検証することは今後の重要な課題である。筆者の活動の中で知見を蓄積し、精度を上げていきたいと思う。

また本研究では、成果をどのように可視化するかという課題も残っている。本研究では成果の抽出に焦点を置いたが、抽出しただけでは道半ばである。その活用法としては既存プロジェクトへのフィードバックと広報などを通じた支援者の拡大などが挙げられるだろう。前者においては6-1新しい発見で述べたように、大きな収穫があり、活用の目途はたった。しかし、後者においては今回得られた成果をどのように視覚化し得るのか。そもそも今回一つのテーマとして挙げてきた評価におけるコスト面、持続可能性を重視したのは、組織自体が持続可能なものになってこそ、継続的に成果を出すことが可能になり、社会に貢献し得るという信念からである。そのためには支援者を継続して得ていくことが不可欠で、そのためにこそ成果の可視化は重要となる。この点も今後の課題として取り組んでいきたい。